

ここにおるんや

山下 壮 起

奨励者紹介〔やました・そうき〕

日本キリスト教団阿倍野教会牧師

イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください。あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができるのです。永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。父よ、今、御前でわたしに栄光を与えてください。世界が造られる前に、わたしがみもとで持っていたあの栄光を。

世から選び出してわたしに与えてくださった人々に、わたしは御名を現しました。彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに与えてくださいました。彼らは、御言葉を守りました。わたしに与えてくださったものはみな、あなたからのものであることを、今、彼らは知っています。なぜなら、わたしはあなたから受けた言葉を彼らに伝え、彼らはそれを受け入れて、わたしがみもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じたからです。彼らのためにお願いします。世のためではなく、わたしに与えてくださった人々のためにお願いします。彼らはあなたのものだからです。わたしのものはすべてあなたのもの、あなたのものはわたしのものです。わたしは彼らによって栄光を受けました。わたしは、もはや世にはいません。彼らは世に残りますが、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。わたしは彼らと一緒にいる間、あなたが与えてくださった御名によって彼らを守りました。わたしが保護したので、滅びの子のほかは、だれも滅びませんでした。聖書が実現するためです。しかし、今、わたしはみもとに参ります。世にいる間に、これらのことを語るのは、わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるためです。」

(ヨハネによる福音書 17 章 1—13 節)

釜ヶ崎で

わたしが働いている阿倍野教会から歩いて 20 分ほどのところに、釜ヶ崎とよばれる町があります。日雇い労働者や野宿生活者が多く暮らす街として知られています。その釜ヶ崎には、「あいりん総合センター」という建物があります。この建物は通称「センター」と呼ばれ、労働を斡旋したり、医療が提供される場所でした。それだけでなく、雨風をしのいで寝泊りし、情報交換や飲食を共にする憩いの場として、また、ホームレス襲撃事件から命を守る人間的な生活を営むために、欠かすことのできない空間でした。つまり、釜ヶ崎の労働者や野宿をしながら生活をされている方々にとってのセーフティネットとしての大切な場所だったわけです。

しかし、そのセンターが、2019年4月 24 日に強制閉鎖されてしまいました。それは、今の天皇が即位

した2019年5月1日のちょうど一週間前の出来事でした。3年前のその頃、「令和」という「新しい時代」がやってくると、国中がお祭りムードでした。一方で、そのときセンターでは200人以上の警察によってそこに寝泊まりしていた日雇い労働者や野宿生活者の強制排除が行われ、かれらの荷物は建物の外に放り出されてしまいました。そして、閉鎖されたセンターのシャッターには「センター内の荷物について、令和元年5月24日までに引き取りに来てください。期日までに引き取りに来られない場合は処分します。」と書いた紙が貼られていました。

この貼り紙を見て、ゾッとしました。日雇い労働者や野宿生活者は「令和の新しい時代」に相応しくないというメッセージのように思えたからです。大阪府は建物の耐震性の問題を理由にセンターの閉鎖を決めましたが、その過程においてセンターやその周囲で生活する人びとの声に耳を傾ける機会を一切持とうとしませんでした。そして、一方的に暴力的な形で、弱い立場に置かれ、声を奪われてきた人びとを排除したわけです。

同じようなことが、大阪では繰り返し行われています。都構想が2度にわたって住民投票で否決されたにもかかわらず、広域行政一元化条例を制定して、都構想でやろうとしていたのと同じことを行っています。また、カジノの問題も同じです。そこに生きる人びとの声を無視して行われる政治は、釜ヶ崎をめぐる起きていることと根っこの部分でつながっています。

イエスの祈り

先ほど司式者の方が読んでくださったのは、最後の晚餐の終わりにイエスが献げた祈りの言葉です。それは、弟子たちのため祈りでした。イエスは最後の晚餐で、これから自分は捕らえられ、殺されてしまうと弟子たちに告げました。その予告によって恐れを強いられ、生きる希望を見失いそうになる弟子たちのために、イエスは祈ったわけです。ただ、その祈りには、イエスの祈りの言葉としては不自然に聞こえる箇所があります。3節での「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」という言葉です。イエス自身の祈りなのに、「イエス・キリストを知ることです」と、イエス以外の人が祈っているような言葉に違和感があります。

この不自然な記述の背景にあったのは、ヨハネによる福音書が書かれたときのユダヤ人キリスト者たちの危機的な状況です。当時、イエスを信じる人たちは、まだユダヤ教のなかの一つのグループと見なされていました。しかし、ヨハネによる福音書が書かれたとき、ユダヤ教において、イエスを救い主と告白する人びとは異端と宣告され、その結果ユダヤ教の礼拝堂であるシナゴークから排除され、イスラエルを支配したローマ帝国から弾圧を受けるようになっていました。つまり、ヨハネによる福音書は、不安や恐れの中にあつた弟子たちに重ねて迫害の危機のなかを生きていたキリスト者を励ますために、最後の晚餐でのイエスの祈りを書き記したということです。

そして、同じことが11節の「わたしは、もはや世にいません」という言葉にも示されています。最後の晚餐で不安や恐れに陥る弟子たちに、イエスが「わたしは、もはや世にいません」と語ること、また、福音書が書かれた時代、迫害を受ける信仰者たちに対して、イエスが「もはや世にいません」と記すことは、希望を打ち砕くもののように思えます。しかし、あえてそのことをはっきりと記すのは、イエスはもう目に見える形では存在しないという現実を受け止めることを促し、しかし同時に、命は死を超えて存在し、それゆえにイ

イエスは今も共にいることを示すためです。

イエスの弟子たち、また、迫害を受けたキリスト者たちが経験したのは、断絶と表現できるかもしれません。反逆者として処刑されたイエスの弟子であったことがバレてしまえば、社会から受け入れてもらえないのではないかという断絶への不安です。また、ユダヤ教から異端とされたことによるシナゴグからの排除による断絶です。しかし、イエスの弟子たちや迫害を受けたキリスト者たちは、断絶された状態から再び社会に統合されることを求めたわけではありません。再び受け入れてもらえるために、自らの在り方や信仰を変えたわけではありません。むしろ、そうした断絶を引き起こす社会とは異なる世界の在り方を求めて歩み始めました。

「わたしはもはや世にいません」とのイエスの言葉は、わたしたちに新しい可能性を示すものです。「わたしはもはや世にいません」とは、イエスの不在を意味します。十字架という暴力によって排除され、殺されてしまったイエスは、目に見える形で存在しなくなるからです。しかし、イエスは自分は神のもとに在り、神と一つになっていると語り、弟子たちを守ってくださいと神に祈ります。この祈りは、不在となったイエス、目に見えない神をどこに見出すかということを示すものです。ここに新しい世界の可能性があります。

神の栄光

そのことは、イエスが繰り返し語る「栄光」という言葉に示されています。「栄光」と訳されたのはドクサというギリシャ語の言葉です。しかし、一般的なギリシャ語では、ドクサは「意見・見解」という意味で使われます。ドクサを「栄光」の意味で用いるのは聖書だけです。そうした意味の違いは、ヘブライ語で書かれた旧約聖書をギリシャ語に翻訳される過程において生じました。つまり、ヘブライ語で「神の栄光」を意味する言葉の訳語としてドクサが充てられたというわけです。

もともと、ギリシャ語のドクサは宮廷用語として用いられていました。つまり、ドクサが一般的に意味する「意見・見解」とは、ローマ帝国の皇帝の見解ということであり、強大な軍事力を背景にした絶対的な権威や支配を象徴するものです。そうしたことを意味するドクサが、神の栄光を示すものとして用いられたわけでは、信仰者たちの知恵に満ちた翻訳だといえます。この翻訳をしたのは、その信仰ゆえにローマ帝国の支配下で迫害を受けた人びとです。その人びとが、「王」の見解を意味するドクサを神の栄光と訳したのは、神の栄光が「王」という権力の支配をひっくり返すことを信じていたからです。つまり、ローマ帝国を支配する権威によって虐げられる、最も弱い立場に置かれた者たちが、それでも生きようとする姿に神の栄光が現わされるという確信です。

そのような翻訳によってドクサという言葉に込められた救いへの希望が、イエスの祈りをとおして表されています。8節から9節にかけて、イエスは自分を信じた人びとによって栄光を受けたと語っています。イエスを信じる人びとは、シナゴグから排除され、ローマ帝国によって迫害を受けているキリスト者たちです。ヨハネによる福音書は、そのような人びとの見解、存在が、神の栄光、神の国を地上に実現するのだと、イエスの祈りをとおしてわたしたちに示しています。それゆえに、イエスの祈りは、今この世界でかき消されそうになっている声に聴く生き方を示すものです。この地上で顧みられることのない人びとがしばらくは、かすかな声を、最も重いもの、神の栄光を現わすものとして受け取るようにとの祈りです。

ここにおるんや

そのようなイエスの祈りは、釜ヶ崎をめぐる現実と重なるものです。今日最初に、「あいりん総合センター」が3年前に耐震性の問題を口実に強制閉鎖されたことをお話しました。そのセンターの閉鎖を提案したのは、「あいりん地域のまちづくり検討会議」と名付けられた協議会でした。でも、その会議を構成するメンバーには、あいりん地域に暮らす労働者や野宿生活者の人びとは一人も選ばれませんでした。そして、その会議のメンバーとして選ばれた「専門家」や「投資家」という権威ある「意見・見解」が「まちづくり」をどう進めるかを決め、釜ヶ崎に生きる労働者や野宿生活者の声はその話し合いから排除されてきました。その結果、そこに暮らす労働者や野宿生活者のセーフティーネットであったあいりん総合センターが奪われてしまうこととなりました。

しかし、釜ヶ崎に行けば、排除された人びとの声がいろんなところから聞こえてきます。その声を象徴するのが、「この国は令和」という文字です。シャッターが閉じられたあとも、あいりん総合センターの周りには野宿生活者の人たちが、段ボールで生活の場所をつくっています。その段ボールに、「この国は令和」と書かれています。しかし、それは「この国はれいわ」と読むものではありません。「令和」の二文字には、「つめたいわ」とフリガナがふってあります。「この国はつめたいわ!」と、生活を奪う国家権力への異議申し立ての言葉です。そして、あいりんセンターの周囲には、今も多くの人たちがシャッターの外側に生活するスペースを構えて暮らしています。それは「ここにおるんや!ここで生きてるんや!」ということの表明です。

ヨハネによる福音書は、排除されるキリスト者たちの声に、祈りに、生きる姿に、イエスの栄光が現れていることをわたしたちに伝えています。それは、命を排除しようとする力が働く現実のなかで、それでも「ここにおるんや!」と叫び、命を締め付ける現実と抗うように呼吸をして、生活をして、自分を自分として生きる人びとの姿のなかにイエスの姿を受け取ることです。この世界の片隅で、「ここにおるんや」と叫びをあげる人びとのあいだにイエスの姿があります。

2022年11月2日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録